

鉄道まちづくりの裾野を広げる —くろワンの挑戦— 「シビックプライドの継承」と「知識の民主化」実践の25年

黒部ワンコイン・プロジェクト「鉄道を活かしたまち黒部」事務局 興水一紀
http://www.kurowan.com/、railcity96b@gmail.com

はじめに

富山県黒部市は、大正時代から続く黒部川の電源開発の経緯の中で発展した「鉄道のまち」で、北陸新幹線、あいの風とやま鉄道、富山地方鉄道（以下、地鉄）、黒部峡谷鉄道、関西電力専用鉄道という、規格の異なる5種類の鉄道網が共存している。もっとも、「黒部ワンコイン・プロジェクト“くろワン”（以下、当会）」の活動根拠は、単なる鉄道への愛着のみではない。かつて黒部には、幹線鉄道（国鉄）から地域への“回廊”として「黒部支線」が存在したが、1969年にその重要性に気づかず廃止された。その後の都市デザインに及ぼした悪影響は大きく、「一度失った鉄路は二度と取り戻せない」という教訓は、今も地域の潜在的な危機感として共有されている。



1. 「知識の民主化」への歩み：地域社会との歩調（2001年～）

（1）市民参画の原点：新幹線市民ワークショップ（2001年～2005年）

2015年の北陸新幹線金沢開業に向けたプロセスでは、黒部宇奈月温泉駅周辺整備や二次交通の動線について、市民自らが交通政策を学び、沿線自治体間の連携も見据えた検討が行われた。これが、現在の黒部における公共交通まちづくりの合意形成手法の基礎となっている。

（2）事業者との連携と知見の蓄積（2006年～）

当会は活動開始当初より、地鉄と課題を共有し、共に歩む関係を築いてきている。20年続く「くろワンきっぷ」等のソフト事業や、住民自らが行う駅舎の美化・ペイントラッピングなどは、この相互の信頼関係と駅への誇り（シビックプライド）から生まれたものである。講演会の開催など知識のアップデートを重ね、客観的な根拠に基づいた議論ができるよう努めてきた。

鉄道まちづくりの裾野を広げる —くろワンの挑戦— シビックプライドの継承と「知識の民主化」に向けた25年間の実践

- 1969年「黒部支線廃止」の教訓：一度失った鉄路は二度と戻らない。
- 新幹線市民ワークショップ(2001～2005)・周辺整備計画(2006-2007)から続く市民議論の蓄積と継承。

実践的な取組み

- **くろワンきっぷ (2006年～)** 20年続く取組。春と秋の期間限定で1日500円のフリーきっぷを提供する利用促進イベント。
くろワン出発式
- **面的活用：歴史・自然の再発見** 桜巡りや黒部古道ウォーキングと連動。駅を「点」ではなく地域の魅力を繋ぐ「線」として活用（くろワンきっぷ活用）。
- **市民による駅の美装化** 駅舎ペイント、ラッピング、花プランター設置。住民自らが手をかけることで、駅への「誇り」を醸成。

知の習得と民主化（市民の手元へ）

- **定期的な講演会・勉強会** 専門家や初代市長を招聘。歴史的文脈から知識を学び、アップデートする場の創出。
講演会(学識者招聘)
- **専門知の一般開放** YouTube等のSNSを活用し、全市民が交通政策を自分事として語るための「知の種火」を絶やさない取組み。
- **議論の連続性の担保** 首長の交代や職員の異動で途切れがちな「政策の記憶」をSNSでアーカイブ化。建設的議論ができる土壌を構築。

価値の可視化（市民の手元へ）

- **アンケート調査ワークショップ**・沿線住民意識調査。デジタルツールを駆使し、正確な市民の意思とニーズを可視化。
ワークショップ報告書
- **社会的便益の試算 (2026)** 国交省マニュアル等を指針に仰ぎ、鉄道の真の価値を算出。都市の装置としての意義を考察。
Webアンケート

 facebook
  YouTube
  X

2. 議論の継続性を支える情報提供：存廃問題への向き合い方

地鉄の存廃問題が深刻化したコロナ後、行政、議会、報道においては、「事業体の収支」に

偏った議論に陥っている。当会は、これまでの経緯から多角的な視点を提供するための活動を行っている。

(1) 「知見の継承」による議論の安定化

行政組織における首長の交代、キーとなる職員の異動は、過去から積み上げられた知見や議論過程が継続されにくい。当地においては、例えば、「黒部宇奈月温泉駅東口交通広場」における「公共交通優先」の原則について知見が継承されなかった（公共交通と自家用車の分離を解消）。当会は、市民団体の立場から過去の経緯や理念を SNS 等でアーカイブ化・発信し続けることで、まちづくりの議論の連続性を緩やかにサポートする役割を担いたいと考えている。

(2) 市民による「知の習得」：定期的な講演会の実施

市民が鉄道を中心としたまちづくり政策を自分事として議論できるよう、基礎知識を学ぶための講演会を継続している。昨年度は、前述の「公共交通優先」の原則を判断した初代黒部市長を招き、当時の理念を改めて伺う機会を設けた。このように、まちづくりの歴史的な文脈を直接学ぶことで、一時的な感情論や先入観に惑わされない、確かな「知」の積み重ねを図っており、それが建設的な議論を支えるシビックプライドの礎となっている。

(3) 「価値の可視化」：社会便益の試算（2026 年最新実践）

富山県内において混迷を極める地鉄鉄道線の存廃問題。単年度思考の「行政・議会」では、赤字補填や事業者支援と称した財政負担の議論に偏りやすく、長期的に都市経営を支える「都市の装置」として、地域鉄道の価値が十分に共有されないことへの不安がある。

今回、当会が、国土交通省の『鉄道プロジェクトの評価マニュアル』等が示す学術的・専門的な評価手法の考え方を指針として仰ぎ、市民の手で社会的便益の試算（本線上市～宇奈月温泉間の便益は、年額約 120 億円）を試みたのは、住民自らが「自分たちのまちの大切なもの」を共通の言葉で語り合える場を作りたいと願ったからである。また、現在行っている当会の大学生メンバー等による「沿線住民アンケート調査」も含め、当会の多角的な取組みを通じて、「市民手作りの道標」を提示しながら、地域の議論の質を高める一助となること目指している。

富山地方鉄道本線(上市～宇奈月温泉)の社会便益の可視化（一考察）

富山県内の議論では無視されている「社会便益(クロスセクター効果)」の一試算

社会便益(年額)
約120億円

※国県等の資料・統計の数値を根拠として試算した



分野	項目と主な内容	試算額
教育・家計	学生送迎の保護者の労働損失回避、自家用車転換での家計支出の増大回避	24.8 億円
資産・財政	駅周辺の地価下落抑制による資産価値の維持、固定資産税の減収回避	34.3 億円
観光・宣伝	鉄道利用の観光客による域外消費の流出回避(観光消費額の維持)	48.7 億円
シビックプライド	テレビ番組やSNSでの露出による全国的な宣伝価値の維持	11.2 億円
安全・生命	交通事故の抑制、代替バス運行の赤字回避、健康増進、環境負荷の低減	4.4 億円
【貨幣換算不能な便益 30】 一度捨てれば二度と手に入らない踏切の権利・不動産やお店の価値を決める「駅から〇分」、地価の維持と家の売りやすさ・「駅近」という家を売る際の強力な武器・全国地図に載り続けることによる知名度・街の名前を全国に売る宣伝効果・地域のルーツを学ぶ生きた教材・映画や歌の舞台になる街のブランド・ロケ地や映像素材としての魅力・聖地巡礼による外部からの集客・地域独自の音の景観(走行音・警報音)・社会のルールを学ぶマナー教育・保護者の送迎負担からの解放・学生の自立した移動と行動範囲・家庭環境に左右されない教育機会・沿線どこへでも行ける就労・通学の選択肢・高齢者の外出機会と孤立防止・歩く習慣による健康寿命の延伸・地域コミュニティと社交の維持・飲酒運転を防ぐ飲食文化の保護・規則正しい生活の指針となるダイヤ・運転不要で自由に使える時間の創出・大規模行事での圧倒的な輸送力・幹線道路の渋滞・物流遅延の回避・災害時の確実な避難ルート・猛吹雪でも孤立を防ぐ最後の交通手段・悪天候でもプロが運ぶ安全の聖域・将来の燃料規制に備えた電気輸送の維持・いざという時いつでも乗れる安心感・次代へ移動の自由を残す責任		試算見送り

おわりに

当会の歩みは、地域の記憶を大切に守り、将来的に市民が冷静かつ主体的に未来を選択できるよう、最小限かつ不可欠な『知の種火』を絶やさないうためのささやかな実践である。

参考文献 新幹線市民ワークショップ報告書（黒部まちづくり協議会）、紀要黒部 14 号（日本黒部学会）、鉄道プロジェクトの評価マニュアル改訂版（国土交通省）、新駅周辺整備計画（黒部市）